

はじめに

周知のことだが、日本は漫画とアニメの輸出大国である。

出版社が出す「紙の漫画」は減少傾向にあるが、ウェブ漫画は、出版社の数も読む人も年ごとに増えている。もちろん、漫画の老舗である小学館、講談社、集英社などもウェブでの出版、読者獲得に注力している。さらに、「コミケ」や「コミティア」などの同人誌活動も入ると、「漫画発表者」は日本国内に数十万人はいるだろう。漫画大国であることは間違いない。

また、『週刊少年ジャンプ』（集英社）は世界中に読者を持っており、外国の読者は自国語に翻訳された『ジャンプ』の漫画を読んでいる。『ドラゴンボール』『ONE PIECE』『NARUTO—ナルト—』などのヒット作は、テレビのある国なら多くの国で放送されている（それも毎年のように）。テレビアニメーションでそれらのファンになった子供

は、翻訳出版されたコミックを買って読むので、コミックはさまざまな国の言語に翻訳されて出版されている。その結果、日本の総理大臣の名前は知らなくても、『ドラゴンボール』の主人公・孫悟空や『ONE PIECE』の主人公・ルフィの名前を知らない子供はいないと言ってもよい。

イスラム教国や社会主義の国には、日本のアニメーション（以下、ジャパニメーション）がテレビで放送されないと場所もある。しかし、ユーチューブなどのインターネットでジャパニメーションを見ている子供は少なからずいるだろう。

世界中にテレビが普及した時代（1950年代～60年代）、各国は安価で子供が喜ぶ番組のコンテンツを求めていた。そのとき、手塚治虫という天才が、大胆にコストカットしてアニメーションをつくる方法を考案した（のちに詳述する）。1963年（昭和38年）に放送が開始された『鉄腕アトム』は、世界初の毎週放送される30分アニメーションである。『鉄腕アトム』は日本の子供ばかりか、輸出されてアメリカの子供も魅了していく。『ジャングル大帝』はさらに受け入れられた。

おかげで日本は、子供が喜ぶテレビ番組のコンテンツを安価に大量に供給できる国になった。前述したように、アニメーションでその物語が好きになった子供は、コミックを買って読みたくなる。その好循環のおかげで日本は世界をリードするアニメーションと漫画の輸出大国となっていた。

というわけで、日本漫画、ジャパニメーションを生み出したのは、長い間手塚治虫だと私も思ってきた。それは間違いない。

私は劇作家・演出家であり、大学教員として学生に漫画を教えているが、もうひとつ、漫画原作者でもある。1990年代末〜2000年代初頭、死にも狂いで、漫画の物語をつくってきた。とりわけ、競争の激しい少年週刊誌を主戦場とし、『週刊少年マガジン』（講談社）で原作を担当してきた。当時『マガジン』は『ジャンプ』と毎週400万部台という凄まじい数で、売り上げのトップ争いを繰り返していた。苛烈な競争社会である。漫画が競争原理で動いていることを、現場で叩き込まれてきた。そのせいか、漫画は「売れてなんぼ」の世界だと思っている。人気漫画雑誌に掲載されている漫画は、売れなくて

は意味がないのだ。

漫画は漫画家が命を削って面白い作品をつくっている創作物には違いない。しかし、漫画雑誌には、ノンフィクションや学芸・學術本のように「歴史的に価値があるから載せよう」「芸術的に優れているから載せよう」という原理は働いていない。要は「お金を生むか、否か」が雑誌に掲載する最大の原理なのだ。

そういう実体験を持つ私は、研究で目を通す日本漫画の通史に釈然としないものがあつた。どういう漫画が出版され、それがヒットし、という事実を紹介されているが、その叙述が羅列的で平面的なのである。その事実を動かしている根本的な原理（経済原則）がすつぱり抜け落ちてきている感が否めないのだ。漫画は本来、経済も巻き込んだ、生々しい人間の営みの結果なのである。

人気漫画誌の苛烈な競争社会にいて、「売れてなんぼ」という現場感覚の人間には、「大ヒット漫画」は次のような定義になる。

爆発的に売れ、漫画表現形式の革新を大胆に行い、それが社会現象を巻き起こすもの——。そういう漫画こそがヒット作である。極端に言うと、絵が下手でも売れるものは売

れる。そして、どんなに絵の上手い人が描いても、売れないものには価値はない。

この条件を満たす漫画家として、長い間、日本漫画の源流は手塚治虫だと思いついてきたが、近年私は、手塚にはさらに源流があると考えようになった。それが北澤楽天と岡本一平である。彼らが手塚以前に、日本漫画史に光り輝きながら、存在する巨人だったことに気付いたのである。

明治期に北澤楽天、大正・昭和前期に岡本一平という巨人がいて、彼らが切り開いた地平に手塚治虫は立っている――。そう考えると日本漫画の歴史がすっきりと見える。巨人である楽天、一平から、同じく巨人・手塚にバトンタッチされ、それが現代の『ドラゴンボール』『ONE PIECE』に受け継がれていると考え、日本漫画史が一貫通貫する。

既存の漫画研究史と異なる漫画史が、私の中で湧き起こってきた。

漫画が手塚から始まると考えると、漫画史にもうひとつ奥行きが出てこない。明治以降、楽天、一平の育てた壮大な「漫画のスピリット」が、手塚に流れ込んで、やがて日本漫画、ジャパニメーションの隆盛につながった、という流れを解説するのが本書の目的である。